



〈119〉

埼玉県立児玉白楊高校 ①



校訓「なすことよして学ぶ」の下で

本校は、埼玉県北部の児玉地域で「一派温暖育」という養蚕技術を広く農民に伝え、農家の経済と生活の向上に尽くした偉人、木村九蔵が明治17年に設立した競進社養蚕伝習所をルーツとする。九蔵の没後、その志を継ぐ弟子たちにより明治32年、競進社養蚕学校とし

て開校。昭和47年、県移校である。

管を機に工業課程を併設し、埼玉県立児玉農工高校となり、平成7年、県立児玉白楊高校と改称し、現在に至る創立123年の伝統を誇る専門高校である。以来、農業科である「生物資源科」「環境デザイン科」、工業科である「機械科」「電子機械科」の四つの学科で時代の変化に対応した「ものづくり」の専門技術教育を進め、「地域の未来を担う心豊かな産業人の育成」に取り組んできた。

管を機に工業課程を併設し、埼玉県立児玉農工高校となり、平成7年、県立児玉白楊高校と改称し、現在に至る創立123年の伝統を誇る専門高校である。以来、農業科である「生物資源科」「環境デザイン科」、工業科である「機械科」「電子機械科」の四つの学科で時代の変化に対応した「ものづくり」の専門技術教育を進め、「地域の未来を担う心豊かな産業人の育成」に取り組んできた。

は、創立100周年を記念して、

の伝統を誇る

0年の伝統校である県立児玉高校と統合し、普通科・農業科・工業科を併せ持つ県内初の高校「新・児玉高校」として再スタートする。地域社会を支える人材を育成する学校として、地域の期待もますます大きくなっている。本年度は開校に向けた最終年度として、その準備を余念なく進めていくところである。

新校へ引き継ぐ本校の精神の根幹に、専門学科高校の神髄とも言える校訓「なすことよして学ぶ」がある。実践を重んじ、試行錯誤の中で学んでいくという意味の言葉である。専門学科では主体的な実習等の実践を繰り返し、その経験から知識・技術を身に付けていく。各教科の座学で学んだことを実習で自ら考え

は課題解決能力が必要といわれている。その教材として一番なのが、地域社会を取り巻くさまざまな課題である。これからの学校は、この地域課題をカリキュラムに取り込んでいく必要がある。それを、われわれの地域学「こだま学」である。

は、創立100周年を記念して、

(黒田勇輝校長)